第５学年　国語科の実践

１．単元名　　登場人物の心の動きと相互の関係を読み、自分の考えを持とう
「大造じいさんとガン」(椋 鳩十)

２．単元目標
○叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとする。(関心・意欲・態度)
○登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。(読むこと)
○優れた叙述に着目して、学習問題や主題について話し合い、自分の考えを深めることができる。(読むこと)

評価基準

国語への感心・意欲・態度	読むこと
・叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている。	・登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。 ・優れた叙述に着目して、学習問題や主題について話し合い、自分の考えを深めることができる。

３．ひびき合う子どもたちを目指すための指導の工夫
研究課題　　「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」
手立て･･･子どもの「切実な問題」をみとった単元構想と授業づくり
ブロックテーマ　「仲間への共感、自立する自分」

（1）単元について
本単元は、学習指導要領第５・６学年「C　読むこと」の目標「目的に応じ、内容や主旨をとらえながら読む能力を身につけさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」を受けて設定した。また、その内容「エ　登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」と、「オ　本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。」を指導するのに適した単元である。

本教材は、狩人である大造じいさんと、その獲物であるガンの頭領・残雪との 4 年を超えるやりとりを、情景豊かに描いた物語である。題名にも表れているように、この二人の関係性とそこに描かれている世界観こそが、この物語の中核であり、そこに主題があると考えた。

物語は、大造じいさんが 30 代後半の頃の話を元に進んでいく。肉体的にも精神的にも、血気盛んな頃であろう。狩人としての経験が豊富で、明るく活力に満ちた人柄に加え、その年齢からして、自分の腕への自信と、それゆえの粘り強さ、荒々しささえ感じることができる。そして、そんなおじいさんが追い続ける相手が、数百～数万のガンの群れを率いる、残雪なのだ。残雪は、大変頭がよく、狩人の誰もが知る存在である。おじいさんにとって、「残雪のために一羽のガンも捕れなくなった」ことは、生計が保てなくなる危機だけでなく、狩人としてのプライドを奮い立たせるものであったのだろう。自分の腕にかけ、「今年こそは」と何度となく残雪に挑むが、そのどの策もが残雪によって見破られてしまう。「いまいましい」念を抱き、「たかが鳥」と残雪を罵倒するおじいさんの心情には、憎しみさえ感じることができる。そんなおじいさんの、残雪に対する心情が一変するのが、３年目の秋である。おとりとして使ったガンがハヤブサに襲われた際、残雪がハヤブサに立ち向かい、そのおとりのガンを助けるのだ。仲間のためにハヤブサと死闘を繰り広げる残雪や、最期の時を感じても、頭領としての威厳を失わず、堂々とおじいさんに立ち向かう残雪。そうした残雪の姿に、おじいさんは強く心を打たれる。そして、「ただの鳥」を越え、同じ命をもつ存在として、その生き様に畏敬の念さえを抱くのである。それは、単に「倒す敵」であった残雪が、「尊敬する存在」へと変化した瞬間と言えるだろう。それは、最終場面で、残雪を「ガンの英雄」「えらぶつ」と称していることからも読み取れ、また「おれたちは、堂々と戦おう」という言葉から、自分を高める存在として、仲間意識さえ抱いていると感じる。こうしたおじいさんの心情の変化が、細かく描かれ、また秋の日の美しい情景描写も加わって、作品を豊かなものに高めている。読み手は自然と物語の世界に引き込まれ、おじいさんの心情の変化にも気づいていくことであろう。ただし、ここでポイントとなるのは、残雪はあくまで野生動物であり、おじいさんへの人間的な感情は描かれていないという点である。それこそ、作者、椋鳩十が描こうとしていた、「動物」と「人間」の在り方であり、その中にあるおじいさんのような生き方にこそ、生きる喜びがあるという彼の考えが表されている。

大造じいさんと残雪、そのどちらかが中心人物というのではなく、その双方によって醸し出される世界観そのものこそが、この物語の主題である。それは、人間と野生動物の対峙という関係を越えて、人間が、動物のたくましく愛に溢れた生き様に感動し、狩人としてだけなく、人間的に成長をしていく姿によって描かれていると考える。

子どもは、優れた叙述から、イメージを膨らませ、登場人物の心情に寄り添って物語を楽しむことであろう。また、そうしたおじいさんの人柄と、生き方に出合うことこそに本単元の意義があり、子どももまたこ

の作品との出会いによって、自分の生き方を豊かにしていくことを願っている。

（2）指導について【子どもの「切実な問題」を見取った授業作りについて】

①主題を捉えるために登場人物の関係性を読む

野生動物として自分の生を全うする残雪の在り方と、それに一方的に感動して自分の生き方を変えていく大造じいさんの在り方に気付いていくためには、そのどちらか一方ではなく、双方を追っていく必要がある。つまり、両者の関係性を読むことで、主題に迫れるのではないかと考えた。残雪にとっては、敵でしかない大造じいさんであるが、大造じいさんにとっての残雪はそうではない。第 1 場面、第 2 場面では大敵であったはずが、第 3 場面での出来事をきっかけにして、尊敬する存在として変化する。そして、関係性を掴むためには、大造じいさんの心情を読み取っていくことが必要になるだろう。場面ごとに、その心情と、そこからわかる関係を追っていくことで、主題に迫っていきたい。

②関係性に目が向くための事前指導と、物語全体を通した学習問題の設定

子どもが、登場人物の関係性に興味関心を持つために、事前に「ラチとらいおん」「らいおんとねずみ」「北風と太陽」のように、題名が「～と～」になっており、両者の関係性が読み取りやすい絵本を、順に教師が紹介する。聞けばすぐにわかる内容であるため、子どもはすぐに、「師匠と弟子みたい。」「親友かな。」「ドラえもんとのび太みたい。」などと、登場人物の関係性ついて自由にイメージを持つことができるだろう。それによって、子どもは、登場人物の関係性が読めるお話がある、と言う経験をする。また、いくつか紹介することで「次はどんな関係かな。」と興味関心が高まっていくと考えた。さらに、「ラチとらいおん」については、簡単な読み取りを行い、関係をはっきりさせるために、二人の心情を読みとっていくという経験もする。これを土台にして、ついに「大造じいさんとガン」というお話に出会う。この題名とお話を目にした子どもは、「この二つはどういう関係なのかな。」と、さらに興味関心を高めることができると考えた。

そうして生まれた思いを元にして、お話を読み、初発の感想から、物語全体を通した学習問題を設定する。感想を持つ視点として「思ったこと・感じたこと」のほかに「皆で話し合いたいこと、学習したいこと」を提示する。後者の中には、すぐに答えが出るものと、そうでないものがあるだろう。話し合いによって解決を図っていくと、すぐには答えが出ない、二人の関係性に関わる疑問について焦点が絞られていくと考える。「大造じいさんにとって残雪は敵なのかな。」「いや、敵だったけど仲良しになった。」と、いろいろな考えが出ることで、迷いが生まれ、「大造じいさんにとって残雪は敵なのか、読んではっきりさせたい。」という知的好奇心が生まれると考えた。その際、関係性は、場面ごとに追っていくが、初めに物語全体を通した学習問題を設定することで、場面を越えて、お話全体を捉えていくような読みが生まれることも期待している。

③関係性を読むための手だて

まず、本作品は、昭和 16 年代に書かれており、狩りの文化や、炉端の様子など、現代の子どもにはイメージしにくい所がある。そこで、そうしたものは視覚的に捉えられるように、写真や実物を掲示し、物語に入っていきやすいようにする。

次に、関係性を読むということは、登場人物の心情に寄り添った読みから一歩離れて、客観的な立場から、再度お話を捉えることになる。子どもによっては難解であり、心情の読みも浅くなってしまうことが考えられる。そのために、第 1 場面では、①大造じいさんの気持ち、②(①を元に)大造じいさんにとっての残雪の存在とは何か、③残雪の気持ち、④残雪にとっての大造じいさんの存在とは何か、という手順を丁寧に全体で踏んでいく。そして、第 2 場面、第 3 場面と読み進めていくに連れて、徐々にこの手順が自分で踏めるようにする。また、大造じいさんと残雪、それぞれの心情は色分けをし、視覚的に捉えやすいように指導する。ただし、残雪については、おじいさんに対する心情は描かれていないことも、この過程の中でおさえていくようにしたい。

実態にもあるように、物事を客観的に捉えることが困難な子どもがいる。だからこそ、丁寧に手順を踏みながら、そうした力がつくように、個別にも指導していきたい。

④本時とひびき合いについて

本時では、第 3 場面での「大造じいさんにとって残雪は敵なのか」を話し合うところを取り上げる。第 3 場面は、大造じいさんの心情が大きく変わる場面である。よって、場面ごとに読み進めてくる中で、ここが最も迷う場所であり、子どもが「皆の考えも聞いてはっきりさせたい。」と、より強く思うところだと考えた。また、そうした思いこそが本単元における切実な思いであると考える。敵か、敵ではないか、自分の立場を明らかにして、その根拠をこれまで読んできたことと、第 3 場面の叙述に即した一人読みの内容を元にして話し合う。その際に、「ただの鳥にたいしている気がしない」の言葉の読み取りを大切に扱いたい。残雪の行動に、純粋に感動するおじいさんの姿から、おじいさんにとっての残雪が、憎み、恨むほどの敵から、同じ命をもつ存在として、尊敬する存在へと変化したことに気付いてほしい。

話し合いの中では、その根拠に注目して話し合いを進めていく。全体交流の中で、友達の考えを受け入れたり、自分の気付いていなかった、おじいさんの心情の変化や二人の関係性について気づき、自分の考えを強化したり、変化・発展したりする姿を「ひびき合う姿」としたい。また、全体交流のあとの学習の振り返

りで、自分の考えの根拠が増えたり、新たな自分の読みが作られたことを、個の読みが高まったと捉えたい。
　子どもの中には、自分の考えに意固地になって他を受け入れなかったり、友達の考えに付いて行けないと思い、諦めてしまったりする子どもがいる。第 1 場面からの読みを丁寧に行い、皆での話し合いを通して、自分の考えに広がりや深まりが生まれていく良さを実感していってほしい。また、そうして出会う、大造じいさんとガンの世界観から、本学習が、自分以外の人・事物に感動し、自分の生き方を豊かにしていく力の芽生えとなることを願っている。

5．単元指導計画（全 13 時間）別紙単元構想参照

次	時	学習活動	主な支援・留意点【評価】
一	1・2	○物語を読み、登場人物の関係性を考えよう。 「ラチとらいおん」「らいおんとねずみ」「北風と太陽」	・学級文庫に椋鳩十の物語を置く。
二	3～11	○全文を通読しよう。 ・題名読み、全文通読、新出漢字、難解語句の確認、初発の感想、学習問題の設定 大造じいさんにとって残雪は敵なのか ・物語の設定を確認する。 ○場面ごとに大造じいさんと残雪の気持ちを読み、二人の関係を明らかにしていこう。 ・第一場面 ・第二場面 ・第三場面≪本時≫ ・第四場面 ○このお話を読んで、自分が感じたこと・考えたことを交流しよう。	・音読は、家庭学習の中で毎日行うようにする。 ・本文のほかに、学習感想と、読み取ったことを根拠に関係についてを記すワークシートを用意する。学習に連続性が生まれ、発展していくようにする。 ・登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。【読むこと】 ・叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている【関心意欲態度】
三	12・13	○椋鳩十の他の作品を読んで、みんなに紹介しよう。	

6．本時について

（1)本時目標

第三場面での大造じいさんの心情の変化について、叙述に即して読み取ったことを根拠に、大造じいさんにとって残雪はどんな存在なのかを話し合い、その変化に気付くことが出来る。

（2）本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点・評価（◇）
大造じいさんにとって残雪は敵なのか	・これまで読んできたことと、叙述に基づいた自分の読みを根拠に意見が言えるようにする。
○話し合おう 「敵だと思う」 ・「今日こそ、あの残雪めに」って言ってて、残雪を倒そうって気持ちが前よりも強くなっているから敵だと思う。ただ、最後の方はどうして銃を下したのかわからない。 ・銃を下したのは、ここで撃ってはひきょうだと思ったからじゃない。敵には変わりないよ。 ・敵だと思う。残雪にとっても「第二の敵がやってきた」って書いてあるから、おじいさんも敵だと思っている。 ・そんな簡単に敵じゃなくなるほど、おじいさんの残雪に対するいまいましい気持ちは弱くない。やっつけたいって思うほどだったんだから。だから敵だと思う。	・同じ考えでもつなげて言えるようにすることで、発表することに抵抗のある子どもでも自信が持てるようにする。
「敵ではないと思う」 ・3 場面の初めの方は「あの残雪め」とかすごく緊張もしているし、絶対倒してやるって感じ。でも最後のところは「ただの鳥に対している気がしませんでした」ってあるから、気持ちが変わっているんだと思う。だから敵ではなくなった。 ・仲間を助けたり、堂々とした残雪の姿に感動したんじゃないかな。だから、打てなかった。 ・4 場面を見ると、残雪を助けて、「ガンの英雄」とか読んでるから、やっぱり 3 場面のこれを境に、気持ちが変わっているんだと思う。残雪の姿を見て感動したんじゃないかな。だから、感動した相手とか。 ・ただの鳥だと思っていたから、余計にこの姿に感動したんだと思う。	◇登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。【読むこと】 ◇叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている【関心意欲態度】 ・考えを再構築する時間を設ける。立場が変わったり、考えの根拠が増えた場合には、カードに書き込むようにする。
○もう一度自分の考えをまとめ、学習の振り返りをしよう	

7．本時案【改訂版】

（1)本時目標

第三場面での大造じいさんの心情の変化について、叙述に即して読み取ったことを根拠に、大造じいさんにとって残雪はどんな存在なのかを話し合い、その変化に気付くことが出来る。

（2）本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点・評価（◇）
大造じいさんにとって残雪はどんな存在か。 ○話し合おう 「敵だと思う」 ・「今日こそ、あの残雪めに」って言ってて、残雪を倒そうって気持ちが前よりも強くなっているから敵だと思う。 ・「わくわく」ってあるから、自信がある。倒すことを楽しみにしているのだと思うから。 ・銃を下したのは、ここで撃ってはひきょうだと思ったからだ。敵には変わりない。 ・何年間も、こんなに長くまた作戦を練って戦っているから、敵だと思う。 「敵でもライバルに近い敵だと思う」 ・殺したいけど、仲間のために必死でハヤブサと戦う残雪に心を打たれている。敵なのは変わらないけど、残雪の仲間を思う気持ちに気付いたからちょっと違う。 「ライバルになったと思う」 ・それはライバルに変わったってことだと思う。撃てるのに撃たなかったんだからもう敵じゃない。銃を下したときに残雪のそういう姿に感心した。だからライバル。 ・仲間を助けたり、堂々とした残雪の姿に感動したんじゃないかな。だから、打てなかった。 「特別な思いを抱いている存在」 ・仲間を思う残雪の姿にも感動したと思うけど、それだけじゃない特別な気持ちを持ち始めていると思う。ライバルとはちょっと違う。 ・頭領として堂々とした姿を見せたことに感動したんだと思う。「ただの鳥に対している気がしない」ってあるから。最期は死に際って意味だから、死を覚悟しているんだと思う。 ・仲間を必死に守ったり、頭領としての役目を果たした残雪に感動しているんだと思う。 ・「たかが鳥」が「鳥に対している気がしない」に変わった。だから、ただの鳥じゃない、人間みたいなものを感じて感動しているんだと思う。どんな存在かはよくわからない。 ・ただの鳥だと思っていたのに、仲間を守る姿とか、頭領として死を覚悟してでも堂々とした姿を見せた残雪に、おじいさんは感動したんじゃないかな。鳥なのに尊敬している感じ。 ○もう一度自分の考えをまとめ、学習の振り返りをしよう	・全体での話し合いの前に、子どもが意見交流を望む場合は、他の人の意見を知るための時間を持つ。 ・これまで読んできたことと、叙述に基づいた自分の読みを根拠に意見が言えるようにする。 ・根拠の同異に気付いていけるように声掛けをする。 ・同じ考えでもつなげて言えるようにすることで、発表することに抵抗のある子どもでも自信が持てるようにする。 ・「ただの鳥に対している気がしませんでした。」の大造じいさんの気持ちを深めるようにする。 ・答えを一つに絞らず、叙述を元に、考えを深めていったことを大切にする。 ◇登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読むことができる。【読むこと】 ◇叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている。【関心意欲態度】 ・話し合いの中で、新たな課題が出てきた場合は、次回につなげる。 ・考えを再構築する時間を設ける。立場が変わったり、考えの根拠が増えた場合には、カードに書き込むようにする。

７．実践を終えて

大造じいさんと残雪の関係性を読むことで、主題に迫っていくように単元をつくっていった。主題が難しいことや、物語が長いことなど、子どもにはハードルが高い学習となることが予想されたが、どの子どもも物語に入り込み、自分の考えを持って毎時間の話し合いを楽しむ姿が見られた。ただ一方で、その読み進め方によって主題に迫れなかった部分もあると感じている。それらの点について振り返っていきたい。

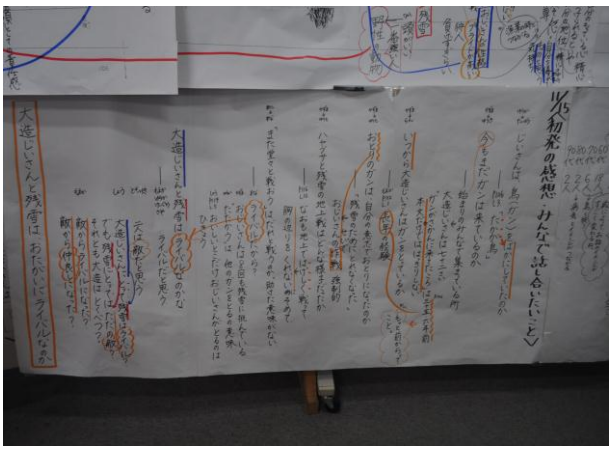
(１)実際の単元づくりについて

①関係性に興味関心が向くための事前指導

まず初めに、関係性に目が向くように「ラチとらいおん」という物語を読んだ。この物語を読んだ子どもは、「二人は師弟関係みたい。」「ドラえもんとのび太だよ。」とそれぞれに主人公の関係性について感想を持った。そして「二人はどんな関係なのかを知りたい。」という思いがうまれた。これを本物語における学習問題にして、「二人の気持ちを読んでいったらはっきりすると思う。」という子どもの声を元に、この物語を読んでいった。その際には、一人読みの基本的な方法を確認し、各々に読んだ二人の心情を根拠に「だから、～な関係。」と自分の考えを持つことを指導した。多くの子どもが楽しんで読むことが出来たが、中にはこの時点で、叙述から読んだ心情を、サイドラインを引きながら本文に書き込むことが困難な子どももいた。もう少し単純で、物語が短いと良かったかと振り返る。ここでの学習は、関係性が読めるという経験を持つことと、関係性が読めたという自信を持って本題につなげていくことが一番のねらいであったため、読み込み過ぎないことを心がけた。そしてこのすぐ後に、「北風とたいよう」「らいおんとねずみ」の二つの物語を、「この二人はどんな関係かな？」と投げかけながら読み聞かせをした。数分で読めてしまう短いものである。子どもは、口々に二人の関係について言い合い、それを楽しんでいるようであった。その雰囲気の中、「次はこのお話を読んでみよう。」と、「大造じいさんとガン」の題名を登場させた。

②導入

まずは題名読みをした。構想通り、大造じいさんとガンの関係に目を向けている子どもは約半数いた。



初発の感想で上がってきた「皆で話し合いたいこと」について、一つずつ検証していった結果、「大造じいさんと残雪はライバルなのか。」という疑問が残った。子どもからは「最初は敵だけど、ライバルみたいになったと思う。」「ライバルから、仲良しになったんじゃないか。」「二人の関係は変わってる気がするけど、よくわからない。」と言った声が聞かれ、その中には、「大造じいさんにとってはライバルな気がするけど、残雪にとっては違う気がする。ただの敵かな。」と言った意見も出され、クラス全体でも意見が大きく分かれた。そうした話し合いを経て、「大造じいさんと残雪は、お互いにライバルなのか。」と言った学習問題ができた。ここからは、この学習問題を元に場面ごとに「大造じいさんにとっての残雪はライバルなのか。」「残雪にとっての大造じいさんはライバルなのか。」という検証を、二人の心情を読むことではっきりさせていくこととなった。

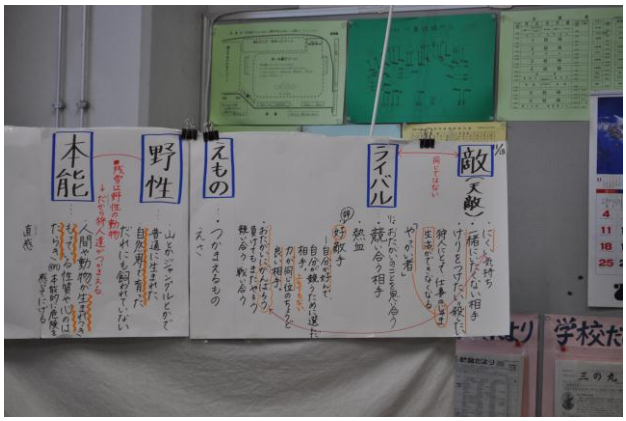
場面ごとの読み込みを前に、物語の設定や難語句の確認を行った。わかりにくいものは写真を見せ、第一場面でのうなぎ釣り針や畳糸は実物も見せた。知ってそうで知らないものが多く、子どもは興味関心を高め、物語を楽しみにしているようであった。導入として効果的であったと思う。

③本時までの流れ

いよいよ第一場面より、双方の心情を読み取り、関係性を明らかにしていく学習が始まる。

第１場面では、「１年目のうなぎ釣り針作戦」という名前を付け、主に大造じいさんの残雪に対する憎しみを考えた。その際、「たかが鳥」「いまいましい」「ううむ」の言葉には子どもが立ち止まって考えられるように指導をしたところ、そうした言葉や情景から、二人の人物像についても子どもから意見が出た。一人読みの段階では「二人はライバル関係。」と言っている子どもが半数近くいたが、最終的には残雪の心情は読みとれないこと、狩人という在り方と、大造じいさんの性格を考えると「お互いに敵である。」という考えに多くの子どもが至った。また、関係性を明らかにする話し合いで出てきた「ライバル」や「敵」などの言葉については、子どもの言葉で定義づけをするようにし、共通理解を図った。

一方で、問題として残ったのが、残雪の心情についてである。本文中の「本能」「野生」の言葉から、「本能行動に感情はない。」ことを確認したが、子どもには大変理解しづらく、「本能で動いている残雪だけど、第 2 場面になったら、大造じいさんに対する気持ちが出てくるかもしれない。」と根拠のない想像を広げている子どもがほとんどであった。これは、子どもがこれまでに、どの物語を読む際にも、中心人物の心情を考える経験を積み重ねていることが大いに関係していると考える。「心情が描かれない中心人物がある。」という経験は初めてであり、残雪の思いを自由に想像し、その変化を期待する姿が根強くあった。そうして、残雪の心情については、曖昧さを残したまま、次に進むこととなった。



第 2 場面では、「2 年目のタニシ作戦」と名前を付け、「タニシ五俵」「ほおがびりびり」「ううん」の言葉や情景から、大造じいさんの高まる残雪への憎しみや執念を考えた。また、大造じいさんと残雪の関係を、折れ線グラフに表したもの(両極に残雪と大造じいさんを置き、その中心に近づくと親近感や仲間意識が高まるイメージ)を子どもと共に作り、そうした大造じいさんの心情の変化を、全員が視覚的に理解できるようにした。大造じいさんの心情が明らかになる一方で、問題となるのが残雪の心情である。教師が考える主題に迫るためには、残雪と大造じいさんの心の交流はないことを押さえなければならない。そこで、再度、「本能」「野生」の言葉について子どもと一緒に調べたり、他の具体例を教師が挙げたりしがら、その意味を理解していった。そうした学習を経ることで、やっと子どもの中に「この怒りや憎しみは、大造じいさんの一方的なものだ。」「残雪の敵は、大造じいさんと言うより、ただの人間。」と言った考えが出てきた。こうした意見を取り上げ、多くの子どもがそれに納得した。一方で、「なんだか難しくなってきちゃった。」と頭を悩ませる子どもがいたことも事実で、主題に迫る大きな壁であったと考える。

④本時について

そして第 3 場面。本時に関わるところである。物語が大きく揺れ動く場面で、前時の学習感想には「第 3 場面は二人の関係が変わっている気がする。早く話し合って、関係を明らかにしたい。」と書く子どもが多くいた。ここまでの道のりはかなり長く、飽きてしまうことも危惧していたが、それに反して、子どもは読みたい気持ちでいっぱいであったのだ。「わからないことを、はっきりさせたい。」そうした切実な思いが、ここに育ってきていたのではと思う。

そうした思いの元、本時の学習問題は「第 3 場面　大造じいさんにとって残雪はどんな存在か。」となった。二人の中心人物の関係性を追い続けて来た子どもにとって、上記したような思いを持って臨んだこの学習問題は、切実な課題となったのではないかと思う。

教師は前時までの子どもの読みから、「じゅうを降ろしました。」の心情を足場として、「ただの鳥に対している気がしない。」の一文を中心に、それについて考えたいと計画を立てた。それと同時に、前時までの一人読みの深さには、かなりの差があり、この場面においても「敵」だと考える子どももいれば、「残雪を人間みたいに感じている。」「すごく大きい存在。」と書いている子どももいた。よって、大造じいさんの心情の変化に気付くことを全体のねらいとし、後者のような考えを深めていくことを願いとした。

話し合いを通して、全体が大造じいさんの心情の変化に気付くことはできた。問題となったのは、事前に考え、根拠としている言葉や文章がそれぞれに異なり、前述した二文についても考えが深まっていかなかったことである。じゅうを降ろした場面について「仲間を救う残雪の姿に感動した。覚悟を感じた。」と意見する子どももいれば、「救ったのは、自分の大切なおとりのガンを助けてくれたからだと思う。」と間違った読みをする子どももいた。同時に、「たかが鳥だったのが、ただの鳥に対している…とあるから、頭領としての威厳に感動したんだと思う。」と最後の一文を取り上げる子どももいた。間違いは修正しながら、徐々に最後の一文に向けて考えを深めていきたかったが、読んでいる箇所がバラバラなため、それぞれを深めるまでには至らなかったのである。話題とする一文や言葉が多すぎたことと、そこで考えたい内容が多かったこと、この場面の読み方として、子どもの実態に合っていなかったことが問題であったと考える。

結果、「大造じいさんはおとりのガンに対してペットのような感情はあったのか。」という学習問題が残り、次時へと続いていった。

⑤成果と課題

本時にできた学習問題は、次時に解決され、最後の一文について考えていく流れとなった。それぞれに「大敵」から「尊敬する存在」へと変わる、大造じいさんの心情の変化を読み取っていたと思う。

子どもにとって難解な主題であったことは、予想されていたことであった。しかし、子どもは、難しいながらも、「話し合うといろいろわかってきておもしろい。」「早く次が読みたい。」とそれぞれに、物語とこの学習を楽しんでいたようであった。また、読みの力にかなりの差がある実態の中で、どの子どもの考えも互いに尊重され、話し合われていく雰囲気があったことは、授業を通して学級をつくっていくという意味においても、大変意義あることであったと考える。その中には、「他の人の考えを受け入れられるようになったんだ。その方が、いろいろわかることがあっておもしろいんだ。」と教師に語った子どももおり、成長を感じる一場面であった。本時では、教師の願いまで届かなかったが、単元を通してそうした子どもの姿が見られたことに関しては、ひびき合いが見られたと考え、成果としたい。

課題については、一つに読み方があると考える。今回は、学習問題を明らかにするために、様々な一文や言葉から読み取れる心情を根拠に話し合ったが、一つの文や言葉について皆はどう考えるか、と言う方法で進めた方が、焦点化されやすく、考えが深められたと振り返る。そのためには、内容の多い第３場面は、いくつかに分けて読むことも有効であっただろう。また、読み進め方として、文章中の言葉をもっと大切にして、読み込む必要があったと痛感している。

読み方以外に課題として考えるのは、教師自身の単元づくりの癖である。自分の考える主題や読みに近づけたいがあまり、子どもと一緒に考える柔軟さに欠けていたことを反省している。自分の教材分析を一端離れて、子どもの視点で再度主題を捉えなおし、自分の考えに近づけていくような手順と、余裕が作れるようになることが、私自身の今後の課題である。

長い時間をかけて、じっくりじっくり読んでいった物語である。最後、第４場面まで読み切った後には、充実感・達成感と共に、疲れさえ垣間見えた子どもたちであった。一つのことを、皆で解決してく貴重な学習となったと感じている。今回の経験を生かして、またこの物語に挑みたい。